

幼児期における音楽教育の一考察
～打楽器の導入による音の創造と自己表現の実現を目指して～

村 田 藍
四條畷学園短期大学

A Study of Music Education in Early Childhood
～ With Percussion Instruments; For Children's Creativity and Self-Expression ～

Ai Murata
Shijonawate Gakuen Junior College

幼児期における音楽教育の一考察 ～打楽器の導入による音の創造と自己表現の実現を目指して～

村田 藍*

A Study of Music Education in Early Childhood ～ With Percussion Instruments; For Children's Creativity and Self-Expression ～

Ai Murata

人はこの世に生を享けた瞬間から、本能的に音に反応し音との触れ合いが始まる。生まれたばかりの乳児も、まだ視力がはっきりしないうちから音には敏感に反応し、次第に自ら音に耳を傾け、音からいろいろなものを感じとるようになる。素晴らしい音楽に出会えたときには、内から湧き出るエネルギーを感じ、その魅力に心を動かされるのである。

Key words: 幼児音楽教育、打楽器、自己表現

はじめに

平成 29 年 3 月に改正された新幼稚園教育要領の第 1 章総則では、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が次の 3 つの柱で再整理され、具体的に示された。「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」¹⁾である。これらは環境を通して一体的に育むよう努めるものとしている。同第 2 章では、幼児の発達の側面から、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域にねらい及び内容が示されている。その内の「表現」の領域において新設された部分を確認しておきたい。

領域「表現」の内容の取扱いについて、従来の事項では、「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。」²⁾とされていたが、今回の改正で、「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」³⁾という具体的

な一文が追記されたのである。

現代の生活環境において、我々は多くの人工的な音に囲まれている。その環境に耳が慣れ、音を音として認識する意識が薄れてきているように思われる。これらは、日常生活における思考力、判断力の低下につながる恐れがある。そのため、吸収力のある幼児期に、音楽教育により「聴く」という感覚を刺激し意識させることにより、聴き取る能力を育むことが必要になる。まずは、幼児音楽教育の導入の手段として、打楽器を扱うことが効果的だと考える。打楽器を導入することの意義と、如何にして幼児の音への意識を高め、感性を伸ばすことができるかについて考察する。

また、幼児教育において総じて求められているものとして、自己表現力やコミュニケーション能力が挙げられる。スマートフォン等の急速な普及により人間関係の希薄化が謳われる現代、対面的なコミュニケーションは、親子間ですら減少傾向にある。幼児期に体験するコミュニケーションでは、自分を発し、他者の意思や感情を読み取り交流することが重要である。音を様々な形で展開し、音楽を通じて他者と音を合わせることにより、自己表現力やコミュニケーション能力を育むことができないか考察する。

* 四條畷学園短期大学 非常勤講師

I 「耳を開く」～打楽器を活用して～

1. 打楽器の魅力

打楽器は、数ある楽器の中でも最も歴史が古いと言われている。古代の人々は、言葉が未発達の時代から、木や石などを擦ったり打ち鳴らすなどして、生活に利用する音を作り出していた。人と人をつなぐコミュニケーションに打楽器を使用していたのである。

時代と共に役割や種類、構造が多様多様に発展してきた打楽器は、現代のあらゆる音楽に欠かせないものであり、その種類と数は未知数である。打楽器は、音色だけでなく、色、形、大きさ、素材等がそれぞれ異なるため、視覚的、聴覚的、触覚的に魅力があると言える。容易に音が出せるという点と、幼児の身体の発達上扱いやすい楽器が豊富に揃っている点も大きな魅力である。

2. 打楽器における「こころの一言」の創造

打楽器が簡易な楽器であるからこそその魅力と留意点について、柳沼（2003, p.9）は、次のように指摘している。

だれにでも容易に音が出せるということが、ともすると安易性や幼稚性につながり、ときとして打楽器の本質を見逃してしまい、有効な活用がはかられないことがあります。打楽器はその発音のしくみが単純だからこそ、音色や音質についての工夫が必要で、またその工夫が楽しめる楽器であることはほかに類をみません。叩く、打つ、こする、はじく、押さえる、ゆらす、ひっぱる、などの音の出し方や良い音色を求める工夫そのものが、「音の創造」につながります。（中略）たとえ一打であつても「ただの一言」か「こころの一言」かが問われる楽しさを秘めています⁴⁾。

打楽器を幼児に導入する以前に、教師が日頃から音に気を配り「こころの一言」について意識しているかが重要である。「こころの一言」は、どのように創り出されるのだろうか。

打楽器奏者が楽器を前にした際、まず初めに行う非常に大切なプロセスが、その楽器の音色についてあらゆる方向から研究することである。例え

ば、小太鼓であれば、鼓面のどこを叩くとどんな音がするのか、スティックの種類やスティックを振り上げる高さ、スネア（響き線）の有無や、表裏の皮の張り具合の調整により様々な音色を導き出す。このプロセスにより、楽曲において音色を自在に使い分けられるようになり、より豊かな音楽表現が可能になる。

幼児教育においても、幼児が音を創造していく過程を大切に、楽器自体が心地よく鳴り響く音に気付かせ導いていくことが、「こころの一言」を創り出すことになるを考える。そのためには、教師が楽器についての知識と経験を持つことに加え、「こころの一言」への探求心を持ち続けることが重要である。

3. 楽器を選ぶ際の留意点

教師は、常に楽器の調整や環境の整備などをし、活動の安全性に十分配慮しなければならない。また、楽器の大きさや重さ、奏法等が幼児の身体の成長や発達の過程に即しているかなど、数ある打楽器の中から幼児が無理なく奏することができるものを選ぶことが重要である。

例えば、小物打楽器と呼ばれるカスタネット、タンブリン、すず、トライアングル、ウッドブロック、クラベス、木魚、カウベル、アゴゴベル等は、簡単な動作で鳴らすことができ、楽器の大きさや重量からしても幼児にとって扱いやすく、打点が決まっているためリズム奏に適している。マラカス、シェイカー、ビブラスラップ、フィンガーシンバル、ホイッスル、ウインドチャイム等は、他にはない多彩な音色を持つため、音を味わったり創造するには大変適しているが、打点が決まらないため、幼児のリズム奏に使用するには難しい面がある。ギロ、カバサ、ラチェット、ささら、レインスティック等は、さらに多様な音を体感することができ、ある程度発達した幼児であれば扱うことも可能ではあるが、楽器本来の奏法が困難なため、十分な配慮と注意が必要となる。

4. 打楽器による音楽教育の導入

(1) 導入にあたって

新しい打楽器を導入する際には、楽器の構造について、その楽器をよく観察させ、どんな音が出るのか、どんな方法で音を鳴らすのかを想像させ

る。木製、金属製、皮張り等、素材の違いに気付くことや、叩く、擦る、打つ、振る等、奏法についても考えさせる。そうすることにより、楽器への関心が高まり、実際に楽器の音を聴いた時の印象や喜びはより大きなものとなる。

(2) 耳を開き、音を味わう

次に、音色を聴かせる。できれば目を閉じて音に意識を集中させ、音を聴く態勢にさせる。つまり「耳を開く」のである。普段何気なく聞こえてくる音を聞き流すのとは反対に、しっかり耳を開いてたっぷりと音を味わわせる。そこで、教師による「こころの一言」を聴かせる。音が消えるまで緊張感をもって聴かせ、残響音が消えた後の静寂の空間を体感させる。

耳で音を味わうことができれば、どんな音がしたか問いかね、言葉で表現させる。まずは、「タンタン、ポコポコ、ギーッ、シャラシャラ、チーン」など、擬音語で表し、さらには、「硬い、柔らかい、力強い、軽い、きれい」などの具体的な言葉で表すことにより、音がより明確に認識される。それらを発展させることにより、自身と他者との感じ方や表現についての違いにも気付くことができ、表現に広がりが生まれる。この時、教師は常に幼児の反応、感覚に気を配り、それらを尊重しつつ体感させることが重要である。

(3) 音の創造

実際に楽器に触らせる際は、手にした楽器の構造について再度じっくり観察させ、鳴らし方を工夫するよう促し、色々な方法で音色の探求をさせる。一つの楽器で色々な音が出ることを経験させることにより、楽器が心地よく鳴り響く「こころの一言」を、自らの力で見つけ出すことができるかもしれない。幼児が積極的に音の探求をし、音を創造することにより、音楽への関心が高まり、表現することに意欲的になることができる。

教師は、幼児の楽器への興味を最大限に引き出し、幼児自らが創造力を働かせ試行錯誤することや、音を楽しむことを支援すべきである。また、楽器の特性を知り、音色について意識させることで、あらゆる音に敏感に耳を傾けられるようになり、聴く力を育むことができる。

Ⅱ 自己表現とコミュニケーション

1. コミュニケーションとは

コミュニケーションは、ラテン語の communicatio (コムニカチオ) に由来し、「分かち合うこと、共有すること」を意味している。言葉、身振り、手振り、表情など様々な手段を用いて、互いにそれを伝え合い、意思の疎通を図る。我々は、日常的に言葉によるコミュニケーションを頻繁に繰り返しているが、言葉なしに行う非言語コミュニケーションを使うことも多く、こちらの方がより重要な役割を担っていることがある。

他者と音を合わせる際のアイコンタクトや演奏に伴う体の動き、音を出そうとする人の表情や呼吸を感じることも、非言語コミュニケーションである。ここで、幼児音楽教育のコミュニケーションの在り方について考える。

2. 幼児音楽教育における合奏指導の在り方

合奏（アンサンブル）とは、音楽で会話をするようなものである。自分の思いを主張することも必要であり、人の意見を聞くことも大事である。人との対話でバラバラに話をしても楽しくないのと同様に、音楽においてもバラバラの演奏は、聞き苦しくつまらないものである。相手の音や、呼吸、間の取り方、リズム感や歌い方の特徴を、音を合わせながら体で掴んでいく。すなわち、イメージを共有し、コミュニケーションを図るということである。

合奏の具体的要素とは、分担されたり同時に奏したりすること、つまり音楽上の役割がある事である。幼児音楽教育における合奏指導の留意点について、東（1984, p 156）は、次のように述べている。

合奏は個々の演奏する楽器が重なりあい、豊かな響きとなって一人では味わえない音楽の迫力を味わえる。このことは、幼児にとって貴重な体験の一つであり、幼児が表現する能力や鑑賞する態度を身につける基礎となる。合奏に際しては、技術的なものに目標をおいた指導や、演奏困難な楽器の取り扱いが音楽的にふさわしくない。初歩段階では役割を分担しあっているという意識を持たせ、特に、

楽器の音色が互いに聴きあえる程度の内容が適している⁵⁾。

幼児音楽教育における合奏指導は、発達の段階や理解力の成長具合に合わせ、順を追って取り組む必要がある。まずは、リズムに慣れ親しみ、正確なリズムを体で感じる事が重要である。その手段として、言葉をリズムに当てはめる方法、手拍子や足踏みなどの体の部分を使ってリズムを体験する方法などが挙げられる。教師が示すリズムを模倣させることを基本とし、全員で音を合わせ、リズムがぴったり合う心地よい感覚を覚えさせる。

次に、同じリズムをずらし、追いかけてこするカノンに取り組むと良い。他者につられず、正しいリズムを刻むことができていないか、よく聴き合えるようにする。さらに、パート分けをし、パートごとに違うリズムを分担させ、全員でアンサンブルをする。自分の音と他者の音の重なりを聴き取れるよう、リズムはできるだけ単純で明確なものから取り組む必要がある。リズムに慣れてきたら、打楽器を使った合奏へと発展させ、より幅広い音楽活動へと導いていく。

合奏（アンサンブル）を通じて、自分自身の役割を意識させ、他者の表現に気付くことで、他者の気持ちを考えられるようになる。それらは、自己の表現を育むとともに、社会における協調性を養うことができる。

おわりに

幼児期の子どもたちは、好奇心旺盛で吸収力も高い。この価値ある時期にこそ、より質の良い音楽教育を行うべきである。質の良いとは、決して高度な演奏技術を求めるものではなく、音楽的な良い耳、感受性を育てることである。まず、自然の音や身の回りの音に耳を傾けられるよう促し、打楽器を取り入れることで音楽に対する興味を深め、次第にその他の楽器の音や歌声を繊細に感じ取れるよう導いていく。そして、友達や教師と共に表現することの素晴らしさや喜びを分かち合い、幼児自らが新しい音楽経験を重ねていくのだ。そこには、教師の正しい音楽的理解が反映されることを忘れてはならない。

幼児音楽教育において、打楽器を取り入れることは、幼児の心の発達に欠かせない創造力や表現

力、思考力、社会性、協調性などを育むことができる。また、音楽を愛好する心情や豊かな感性をも育むことができる。すなわち、生きていく上で必要な力を養うために有効な手段と言えるだろう。

引用文献

- 1) 文部科学省（2017） 幼稚園教育要領－平成29年3月告示 文部科学省 第1章総則第2-1.
- 2) 文部科学省（2017） 幼稚園教育要領－平成29年3月告示 文部科学省 第2章より「表現」3内容の取扱い.
- 3) 同上.
- 4) 柳沼てるこ（2003）『リズム・ムービングー五感を生かした楽しい音と動きの表現』音楽之友社 p.9
- 5) 東保（1984）「指導上の留意事項（三）」岸井勇雄・大久保稔『音楽「音楽リズム」』チャイルド本社 p.156

参考文献

- 今野貴子・畑瞬一郎（2014）『子どもの心を育む音楽活動』東京藝術大学大学院音楽研究科応用音楽学研究室 〈<http://www.geidai.ac.jp/labs/gcam/>〉 2017年9月25日アクセス
- お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター（2004）『幼児教育ハンドブック』 〈<http://www.ocha.ac.jp>〉 2017年9月25日アクセス
- 東京藝術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文編集委員会編（1999）『音楽教育の研究－理論と実践の統一を目指して－』浜野政雄監修 音楽之友社
- 中島恵子・山下恵子（2010）『音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー（Co-Musictherapy）』春秋社
- 花井清（他）（1997）『言葉・楽器・からだのアンサンブル』音楽之友社
- バント、レスリー（1996）『音楽療法－ことばを超えた対話』稲田雅美訳 ミネルヴァ書房
- ミヒェルス、ウルリヒ編（2000）『カラー図解音楽事典』角倉一朗監修 白水社
- 山田俊之（2002）『楽しいボディパーカッション①－リズムで遊ぼう』音楽之友社
- 山田俊之（2001）『ボディパーカッション入門－体を使った楽しいリズム表現』音楽之友社

－ 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理 －

